



俳諧文庫 二十三

観う集 一九

5
1139
55



1139
55



采守

采守園見外先生嘗撰枕了集陸續
次遂至十又九篇之多今茲刻成使序題
其首蓋俳諧之集愈出而愈夥故歲
作者不下數十百家然篇數之夥多如此
則未嘗聞也先生之於俳歌卓然外一
家棄陳腐脫粘糖能生新意宜不其集
之多且秀而至於斯也今乃世之偏者推

先生及孤山墨梅之本、稱為關東俳諧之
大家也。

文久三年癸亥陽月上浣龍尾園香城撰



半岩問書

槐弓集十九編

山吟ノ黄智老をカク一ノ空

見外

雪ノあらけり知る路を夜川

相高

歌ノ倉のあらく一空を松を中を

外

悟はこの老を茶の味

高

とらあらとの指のまを松の月

外

おもたる春の隣をやままる

高

此秋も南カキつて了遊湯治
繩屋うづのぢく 出女
とくはて所々のあゝ無のたゞ口
りわあぢく 信馬うけまぢく
各侯ていふ事のあらしの作
時はおく望と 難か味あり
市臺の鯛前志をりるるの月
内編まのりて楳をぬりまへ

外 富 外 富 外 富 外 富

山公も此を好とあまの志いひま
江戸の屋又あま倉と見れ
あぢぢくと花のぢくうぢく
子まのぢくあまのぢくま
切舟をまてまぢくあぢぢく
やめとあぢぢくあまのぢく
市んまぢくあまのぢくあま
あまのぢくあまのぢくあま

外 富 外 富 外 富 外 富

物をくわえられとぬりと暮の終り
 西次中あそびつゝも 奉 公
 おちちとつあしとかく金のまゝい道
 刺とて富も横着の うしろ
 物めか癖りうのそく飯時分
 小つとーい半名浦のまじり
 ちつとつとつ川うけをある月の白
 吹あられ阿よのおさね草の穂
 外 富 外 富 外 富 外 富

山の若き音後まの音帰り
 地ひさのすね外うしろの籠
 建是もかおるる住居を
 州の僻 摺 弁 句 述 よれ
 名まこつ初も初まていゝあふおん述
 空もくくく ちやうとるの 端
 外 富 外 富 外 富

森をくぐりて親子魚の長月秋葉 見外

雲のふもとよりあかきを換即一石 禾院

川一凌入荷とせよ厚秋葉を 新南

内の者ひと遠くあき 外

割わさす換おまをわするあき 院

味と帯よのうぬさる水 南

を急すきり住さぬあきとくま 外

は村まおろしを馬子負すあき 院

風をあのうぬりよきを掃きれ 南

産ぬつさまきしあといふ 外

小ア年おろしとあきぬあき 院

物とてのうもやはあき 南

そり入る月の子の味あきとくま 外

あきとくまト照くまの香のすあき 院

休む胃も腰の冷つて州義下
まゝふり初能おくき雲行
比物見も花のあつち明もほし
うかきあつちの平一の代りま
考あつちの結る子餅のあつち
貝路込つちのあつち
おつちの相のさあつち
天宮中初めつ見速つち

外 南 院 外 南 院 外 南

廻板一筋あり一解の命乞
うまふふりの結る耳たつ
物おつちの壳を吐つち
おつちのあつちの結る
行りれ餅も屋へ廻り
おつちのあつちの結る
おつちのあつちの結る
おつちのあつちの結る

南 院 外 南 院 外 南 院

後摩條のあとのたまたま神子あ
 ぬ後摩條のあとのたまたま神子あ
 ぬの言のあつたあつたは引
 古きもまゐりあつたとあつたあ
 こころ神中傳ふまゐりつた人あ
 高き芽ふき——楯の伐あつた
 南 曉 外 南 曉 外

投らまゝく後摩條のあつたあ
 梅のあつたあつたあつたあ
 何あつたあつたあつたあ
 まのあつたあつたあつたあ
 買よりあつたあつたあつたあ
 あつたあつたあつたあつたあ
 遠のあつたあつたあつたあ
 系 孤 柳
 梅 通
 有 市
 淡 市
 九 起
 公 集
 山 城
 純 池

分々入道神の林やあまの産

ナニハ
鼎左

波先を後摺てゆく乙女り車

紫操

忠天や慶うと見えぬ壁ま蝶

蝶足

強力は去り火うたさき山の梅

五絲

さうらー摺柝の柵を一夜りき

初風

衆よ今流あつる一枯柳

イッ
落せ

やうくとまをらぬつくと月来

其迄

貴方や産葉中何れもまきまき

此方

初由うらな電あまのまがぬ物分

イカ
蒼山

瀬初まよる流あやとお森多

逸史

まをりや鶴まをるまをる角あ

近江
丸峰

塊よりを雨の好む村のう郡

イセ
蕙雨

花若蒲風は地情にあうりま

又南

落る葉ま幹の思とあは夜の花

梅井

傍風や踏めり沙婦く響か穴

竹芥

初新や門の飛節の鳥の鈴

轟原

精進百のさるる形の初松魚 ヲハリ 石居

梅を名外に記す 一 清

実を来ておとよき 梅 梅程

春雨や水田の鳥の音 法山友 素溪

投てある芥子りのさす 華岳 華岳

舌見ぬ備り 二 踏

市中や行ある 三 枕

雨晴あり 巻地 巻地

居つぬ 静安 静安

初雪や 山士 山士

大寺の 清深 清深

船多 石高 石高

与 完恒 完恒

蕙 春美 春美

麦 遠守 遠守

香 遠江 遠江

三秋の柳とくわく廣き野山草 遠に 杜水

高嶺と野風をよめる 燈籠が スルカ 九成

うは成さね松明とくわく卯月を カヒ 漣山

黄泉の地をゆく 三休老子の柳 梨軒

名月と袖垣の石鼓かたつぬり 壽村

ぬるほれは竹の子さうり垣の外 杉夕

昔の花をみる老をゆく 紀石酒が 南海

不才の雲水とくわく落つ柳 家 其の古

中くよ身のあま雲や夜木立 一瓜

徳園扇や鏡をぬくまむ春さうら 圭里

あま子と水さうらと夜子りり 竹外

魚さくや雲は目當の煙を盆 蓬室

子舟と竹無理とあま月見が サカシ 旭松

明戸をお園とくわく山草よりぬ 五清

かくと家や我と橋と 永き春 蒼悠

水打とくわく友まへ夕アうぬ 白羽

ハサシ

うつろひ啼き声は是より聞えり

千賀

初雪や街を川より流るる

渚子

花の山吹のあつのはなを屋が

東川

鯛よりとけの魚の音いよの原

眞岳

夜更や冬より雪の音あつ

芦角文

中

そのまぬまの音あつ

春賀

甲斐の音あつ

琴歌女

角力場より流るる花

新茶

咲てわろあつ

歌原文

菊宮

蒼のうらやけを

月夜

叶の音もよみ

文程

夕霞はとよみ

里山

あやうとよみ

吟叢

鳥をえや

蟻足

ひらく

海老

鶴のうらやけ

春山

暮色や下宿の河平一賦ハサシ 其起

飲博の梅とこれ髪や紅梅 寶捲

冬夜うら出ぬとて一更の傘が 豆人

吹たそ風よとてや懶の月 友枝

春梅のこゝろを紅うり孫子口 之菜

孫のとももつとては立居や半の妻カッサ 金陵

つとる空地あくて志とてまう電 遠丈

あゝいまい風もあの中は福の出来 茶外

約多きとあるおとのかそり星 一澄

春ささ木のおあえそめの暮が 吟外

つとるそととては春のやうな 峰雪

引籠の顔遠海は梅りり 月松

春の暮が五位の灯とて入梅が 梅吟

春あけや嵐の中は星あつと 寄一

春あけや梅やとては春の夜捨電ト端 西翁

春あけや梅やとては春の夜捨電 有舎

柳みくや笠おさくくは藤つり

下穂

竹雨

福葉や不測の影れも唐の産

可恨

あまのな名たる鳥年一羽

ヒタ子

一嘆

来馬のあまの好婦もあま累りぬ

山吟

田州より影のこ雨も道にあり

遷芝

あまの穂つるまぐ山皆尾花

扶谷

一聲も地底も啼や初蛙

其貝

五言八道の屋敷に何となく

麦の穂の出るも正字布とて式

三十一

空塵

灯を消さず子のあまの影うら

杜協

雨の月もあまのぬきやもよる

鳥扇

よきりの啼や船より自あま

香疎

まの陰の出るぬきとあまより

其聲

眼の目掃くを巻おさむ唐の事

三和

あまの子やあまのあまの門

麦露

角力とてお抱くは命に牡丹が

桃谷

中川よりわが舟を渡りわがまは
三丁

とく口をまの鬼に結ふしとく
渭川

三月月やあふらぬ川のほとり
精知

橋の先やわがまの秋をいふ寸
一 朔

月の州やとくうらなふ海つま
陽山

うらや縮み解の宗跡かくとく
雲遊

啼く如くとくあふりもあふり
而足

探険もあふりあふりあふり
兼 野

あふりあふりあふりあふり
守 静

田子よりあふりあふりあふり
柳 起

あふりあふりあふりあふり
響 生

あふりあふりあふりあふり
潮 登

あふりあふりあふりあふり
人 左

あふりあふりあふりあふり
上毛 住 一

あふりあふりあふりあふり
卯 号

あふりあふりあふりあふり
古 山

篇出くく事もあつたし梅の内

上毛

玉美

黄巻作まこと江今ゆりふ紀り如

嘯石

と松の松子の葉先もゆりゆり

みどり

初巻作之度たつ市の花あつた

花雄

雨巻作移る鶴川一の篇の松

玄夜

多ふふみのりある見えたり弓始

業三

ゆき後つりも永くの松と思ひしを

玉桂

あつと巻巻木もふふぬ梅の柳

鶴柳

松くわ松のちり水河返歌

乙部

此の巻に添ふき味飯と松色たり

奥岳

生松の赤心実又あつたりこれ松

一巴

松のあつた松の松の松の松の松

葉松

家内中一松の松の松の松の松

楓古

梅の松の松の松の松の松の松

梅外

松の松の松の松の松の松の松

嵐松

松の松の松の松の松の松の松

菊外

たのしみもさるぬ神の木立が

上毛

久人吉

澄佛もあられおろとも及ひに

下毛

菜欣

る草の湯治すぬりやあきさげ

穂長

あつらの船あしりまの峰

浮高

あつらやあつらあつらあつら

月舟

あつら神もあつらあつらあつら

友権

鬼灯や口告ぬをすおとこの子

菜巻

あつらあつらあつらあつらあつら

松風

水仙や雪の中もあつらあつら

梅作又

甫

あつらあつらあつらあつらあつら

花道

河魚のやまのあつらあつらあつら

其雪

あつらあつらあつらあつらあつら

文宗

あつらあつらあつらあつらあつら

王外及

未貫

初花や命婦さあつらあつらあつら

守彦

あつらあつらあつらあつらあつら

雨柳

あつらあつらあつらあつらあつら

十五

よき吉

園栗や 絹の 燈の 強 過 影

下毛

共翼

眼の ありり さわらぶもの あり 川の

ラク

多代女

ひびく 通るや その あり 苗

得二

舟との 心 煙子の うほさ 月 見が

光石

鶯の 踏合さ ありや 市の花

鶯尾

空の せいの 葉の 葉まら せん 杜 鶯

雪西

婦ら あり 髪を けり け 櫛 外

袋 鞆

梨も ともや 味の けり けり 枝 杖

可乙

風の 身 ぬき たり とも あり 夜 月

乙 史

響り 子の 宿 あり あり あり 帰る 厚

東 淵

黄 屋 新 あり あり あり あり あり あり あり

一 解

田の 中 一の 住 居 あり あり あり あり あり

其 堂

此 答 言 あり あり あり あり あり あり

一 止

あさ あり あり あり あり あり あり あり

風 志

子 とも あり あり あり あり あり あり あり

舎津

松 園

いさ あり あり あり あり あり あり あり

大 務

一十一

家玉口お初るく人の磯あり

ナシ

荒山

七夕おあはれんくきふ川の水

ミツハ

露玉

江の原に世並りらるる露玉が

一景

河豆腐に去るるいふお初れ

葱玉

大黒被

新物をとるる一櫃より玉お美

テハ

吹風

新葉の香ももりらるる世並り

吟風

元日も常にかさるる若くは

吹風

神市や月見もうまきやう道

臨水

雲より巾いよとる山に露

露潤

紅糸緒にさゆりておれり乙女が

方一

花名よみぬもとめは不二と

遊子

東の月と柳ありと味ぬ浦の月

江表

姉とさるる入るるもももも福寿草

柳雨

六月や新涼の初め常あつら

景宜

杜若さくちさく水たゆ

左琴

十一

懐の少くはあく余をうけ

テハ

瓊山

あさかしのまよしたまふあそび

重高更

大古

初ねや丸まりのさす家の向

重高更

静風

思はれ人のほそより水永

市楓

やれとて一宮巡りの衣文

日明

涼風を吹きあつめの烟を引

西流

涼しき我を忘れくま居る

花鳥

階下道をやと寸草のふたをさ

瑞一

名月の交るも宵のわらわ

羽林

日さすの中を吹く木のうら

鶯樹

そとろ子があそぶささのうら

之有

葉ぬるるや庭あそびの空

桂儼

まき樹もあそびあそぶ月

王千三

疎齋

素初や品何とあそぶ年の

木原

素我

あそびのれり桐より経る西風

潤外更

淡雲

廿九

終りて心く暖や祠を梅の神

梅臺

初あをらんるまきかきもやあさし

丹巖

末廣や子子休く急るる園が

木直

音年越寸を音くくやを深き

堀海

せん中々の紫やをるる子子やをるる

夕月

汐浪や蕨吹あとし灯もさゆが

荷江

吹て身をさ香あわくと福の波

風号

初雪や多智の雪居の朝帯

松溪

ゆくまのありとも知ぬ深山が

竹外

茶のむやまよとれも二粒はみわい

老圃

そら松の手ふりあり茶のまあ

其東

暮るり音響又原も花のまより引

米花

去る梅や心音をさるれく筆の中

南石

本巻や雨の中もも羽子の音

琴丸

貴客の口あし拾いぬ程のうら

龍像

所中まほしくより紅彩樹のあ

夢窓

士

書中子ありその後の存字
五十二 契史

福りゆくりありに花を植る
三つよ

うけ福り生向ありぬ書すこれ
山水

あふうふは投竿一た身も言交
月照

朝起は馴る霜揃く小舟
響成

高き舞ふおと春あり秋の陰
呉風

初雁や驚く高きうらみ秋
西場

初雁や驚く高きうらみ秋
芥珊

卯の志を上手遊る春の雪
北溪

中国 四国 西国

人立のしるも志ありま春の月
北洋

暮らわと能おさけく桂の雅
月湊

春風柳のおともさるる春り
麦名

たつ福より送手は照る寸萩の世
馱脚

今世こよ生れやうまこをき
半居

あゝおの湯くくつる細く照
字書

福のけたさう市悦の極五とさ
 水もと能くおとす市常
 明わさる妻の名跡や播磨 海
 婢女のおもてふくわをさうの子
 澄と市と空や秋通しわさる
 杵おとよの娘を梅子や冬の雨
 祝歌の二冊をかりておとす縁
 初縁の木のをまよしとよ吹と市

アハ 山 樹

軽 勢

未 田

トサ 之 記 古

雲 外

煙 外

祇 宮

嵐 夕

花の山 猿人 泣きう 我もあれ
 うきろふわ川は多し 別の上
 月赤いおとつひもや小松川
 りのさしを 杉あまれの 松尾 志
 葉をさる 蛙の卵やあまの 案
 雨水の 澄けさあうり 松 三
 くましくと 井車さへも妻の 方

フシユ 鞍 北

妻 谷

アセン 分 別

ヒセン 山 前

ツシマ 傷 笠

ハリマ 松 聲

北 梅

る風子 船鳥 越 百 過 一 市 行

五ト

即 堂

婦と来といふそあま秋を啼故が

涼 雨

名月と船のうら空のうらさう水

一 橋

うらさ水 柳 志 一 庭

石 庭

庭子やを実ふのうら紅葉さす

花 児

青い葉や上の風 廻る 柳の 舟

夢 三

く春りの立雲つさきや 雲の 月

思 楽

船鳥や 利休の 袖にけ 旅一

香 城

船鳥や 松よのうら けて 故と 候

風 舟

つと入や 刺 漆 ぬさ 柳と 女 引さ

春 氏

木つさきの 此 扇 ぬさ 柳と 怪 木 多

一 外

晴のそく下 戸 多 づら 柳と 新 酒 引

佛 外

酒の味 柳と 多 づら 柳と 月 見 衆

有 松

隣に 戸 多 づら 柳と 秋の 月

を 守 守

春ももの とも 春 多 づら 柳と 後

あ 守 守

つらり	水	もの	燈	火	茂	の	光	長	楽
あふり	の	あ	く	小	深	一	白	不	深
併	揺	や	舞	の	く	ふ	も	二	白
舞	の	千	言	あ	も	く	さ	木	下
初	あ	ま	を	阿	く	い	は	と	り
梅	咲	を	常	も	所	く	出	も	志
つ	ら	り	と	又	あ	一	月	は	梅
子	綿	の	多	や	世	治	子	之	水
								水	臺

そ	ら	く	や	あ	あ	あ	あ	あ	あ
駒	い	ま	の	橋	度	は	歩	り	難
あ	ま	の	あ	ま	の	あ	ま	の	あ
木	つ	ら	や	梢	を	り	と	入	ら
柳	の	影	を	上	や	あ	る	月	
三	日	月	や	あ	ま	い	ま	市	の
あ	し	扇	を	つ	ら	く	さ	音	の
つ	ら	を	あ	ま	り	め	海	や	沖
								湖	

寂かなるもやんと多古たそ十日来
 都より虫啼 都より明記り形
 柳の影 空におくあまのあまの月
 料理場をり 影は四寸さるる来
 名月や波子 けりやる波おをを
 刈あとの田水は 閑し月の影
 帰るおれと見られたるあまの
 山のけや梅の 忘るは花は来る

為山
 聖井
 得水
 茶里
 三ヶ峰
 小雲
 小谷
 五雀

春ゆらけいと春とそくゆる 磯若か
 いまがしと 鞍おく馬中 初めは
 春のつらさ 虫の音 春の根更が
 春のつらさ 骨正月は月影の影
 初をを 咲さくのとや 山は 冷
 春のつらさ 花はるる 影は有るる
 春のつらさ 影の影 春の月影の影
 春のつらさ 影の影 春の影の影

桃 磯
 二 京
 外
 三 木
 釋 山
 貫 山
 山
 原 郎

下ろくき標の林巾 和をき付
 五休
 虫みくやあつ風を好の暮る時分
 新南
 雀ぶりのちと強まぬを川 水
 管室
 卵れいぐあつ門きりの際をくぬ
 甘志
 つとる来てつと厚出かけあり
 甘茶
 正月巾あついろき 雀をきぬ
 里木
 余をまよえく給ふは後まけに
 東岳
 鳥をわく見る女あつと巾夜の海
 子号

谷の戸や人の舞くうら梅は月
 幽止
 あれを川や川燈はを江の明り
 芳竹
 嘆子よりうらぬの志はあつと女あつ
 尋香
 鳥と和をきい川まつ福一子若引
 荷少
 鳥を魚を釣の餌はまけ小松川
 弘湖
 鳥を鳥を踏をく人の枝を川に
 芦株
 鳥を鳥を釣の餌はまけ小松川
 永撥
 瓜とれりふよきいふ秋の風
 相高

梅うきや神く風もきくわん

道了

川へきと枝うき萩のさかり

柳原

あさうわの葦まはとあく林道

點石

宵の名やるのあうりそわら

雪古

涼うわ庭をさけり燈州

竹破

物見よか新まき居あつて友生

東華

宿うきもまきんはとよく字子

尾貫

鯨の橋蹴をうき流う解

四端

石をみはるまきまきと秋の

寄名

鶴うきまきくの新く松魚う

乙五

行あやうきあくまきや務の中

未曉

うき居まきまき新雨の性う

乙旌

うきあくとあふる新の萩のま

北叟

うきあくとあふる新の萩のま

右峰

啼すまきまきまきまきまき

竹雙

林まきまきまきまきまき

又

舟より立ちぬく新ぬちをさす

と記雄

あくるお疎剱の松を春さす

漢陽

初秋の舟をゆるりぬくをさす

葎露

酒の生智退く深にお煙を好

好雅

磯へ出く何守る人や月夜

晴彦

河原を舟梅のときを藤の白

姑山

ふらふらの中にあそぶやうにわたりてよきよきゆきこそ
あそびをいひしきりてうきうき

泣あつゝ年宗遠の月見が

見外

人をもつ船をときれそ雪のとき

見外

所はちぬくあるあるのとき

よき字

つきのあそびはははははははは

外

婦さつゝあそびはははははは

外

ぬれ危の月あらくと晴のとき

外

少年のあそびはははははは

外

下社家の路へ出く事なる事
瓢の風も追く事減れ
木はくみの事ぬり交るはし
庭の外へく口舌 こと
後とてお荷を籠り割り
とけくさく印した火の中へぬき
所はあく山梅りくらの道は月
海はゆるく 水下提りの

外 外 外 外 外 外 外

義よりお係り 出来は原々
ありは事の 事世嘉州の如と
おの事と事と見事く事膏の事
廣心耕 地は成の事 物
こと事と事 事おんの 事おんを
つこと事の事お餅と事張る
事おん事のお事ある事一と事
お用おん事ありありさ事

外 外 外 外 外 外 外

栗の植のま死くま黄をむく
けくせのつらやまぬおれを
簪梅子結遠まきりき風情し
紀の山くの見えかくもすれ
葦大根の布やそぬりひきまよ
笛子通しきやきき柳子きき
家毎日月の中ぬりのぬき梅除
板まきりくまうそぬり跡を
外 古 外 古 外 古 外 古

野かしの花とをきりき照はんと
白しきおのゝききぬりき
椿多きおぬりきおのきき
茶脚 高りのつらきき先き
おんのきと花の影引のの上
家まつき中らぬ梅のぬき
外 古 外 古 外 古 外 古

進加

以てあをく明すし船のゆえに集

ヲク

丁角

以てあをく明すし船のゆえに集

アハ

橋外

目あはりの耕地るるや子梅の生る

ニチノ

若礫

月影お骨のく后の給にる

カッサ

海外

あをくぬるや梅まはる月の林

アハ

藤松

生れ中や船まをりてつる

カヒ

湖城

あをくぬるや梅まはる月の林

紅月

有丈

陌志や曉のあはれ花の中

ヲク

柳梢

あをくぬるや梅まはる月の林

ヲク

眺翠

あをくぬるや梅まはる月の林

ヲク

富山

あをくぬるや梅まはる月の林

ヲク

如徳

あをくぬるや梅まはる月の林

ヲク

深花

あをくぬるや梅まはる月の林

ヲク

寄遠

あをくぬるや梅まはる月の林

ヲク

有翠

あをくぬるや梅まはる月の林

ヲク

後好

七

廿一

柳子葉のあふるにそはれつゝ十粒うぶ

カッサ

通一

遠騎の足る台は平敷い穂子集

弁三

芦月

残る身とやうれ音あり秋の水

桃雨

冷あれり世とまほしき夜は月

柳文

柏山

そすつゝその香もくも扇うね

文嶋

余の身はまじくこゝろはとり雨の萩

北川

汲ふは水柱とありぬ井の糸

糸嶋

夕風平江の空高くわさる原

如龍

室のつゝ机の上を秋をうね

松園

抱ひ籠り馴と揃くまをまうを

南陽

磯際の藤屑白ふや雪のうま

半古

露の晴る陸をえん牛の麻吹沖

蒼草

柳のまぶの咲ぬは造物者

悔江

富山午一宿

松をふやぬりさけんたる日の出

南峰

洲の草は船の火さすや舟の原

隈村

立中々々常と菜や如春の角
 其外
 東風中の船の並小川口
 其彭
 下初ととあるい速はま出たりと
 外
 流しと候が今よつぬやと
 彭
 とつとつと雪の来きとふ空候り
 外
 末福を禁と櫻石枯 芝
 彭

雪介のそと流しの中をなるとい
 外
 壺橋の橋とあるは池 岸
 外
 後つとつとつとつとつとつとつと
 外
 終つとつとつとつとつとつとつと
 外
 あつとつとつとつとつとつとつと
 外
 つとつとつとつとつとつとつと
 外
 時鐘が鳴りつとつとつとつと
 外
 あり次部 居つとつとつとつと
 彭

一寸の呪詛をうきやうし

外

温純の外は何もなき

外

月さして草木も蒸らす

外

雲のくも籠りし

外

重水

黄竹や若中もくもなき

酒雄

ふらふら雀や萩の海

石叟

一口又

越たれど所はなき

以外

権子とて中をぬり

萬岳

中々親の力嫌

権好

松風やあらし

和風

子をまのほり

志業

雪の解ぬ

梅雪

下毛

唐あく

可也

初秋や自分

とや女

さくらの耳ある河へ藤の序

江戸

竹丈

船乗務の晴口あはく柳の影

狂舟

旗子お小葦冷やけ後の月

芦山

十月お川舟の落米まわり

龜水

一棹のつらふらふらふらふら

不逞

書初お老ももえぬ葦を走る

多園

旭二梢のこえと小六月

祿柳

嘆き傳ふと水仙をゆきひる

天園

十月お黄粒お山の水

カウサ

孝南

清花おぬきお竹杖のぬきり

希聲

藤あくお里の藤のつら鳴

杖笠

梅のま梅あまのまのつら

旭方

兼子馴と一杖高きんおきき

ミナノ

甘雨

口上のうたおあまの早松葺

竹亭

霜をさくおれおあまの晴

青崖

出来秋お涼に鱒のさく人

澗雨

腕を曲し抱きし樂子の巾子あり

姉くちりも又格別巾素の楯 見外

霞吹よ志ある裏紙戸の口 外守

たつと今くけとまのりの船吹く 外

子履に足は木履うつく 守

下毛見の係は廻り音の月 外

顔あふくそ唇のをーあふ 守

笠松の市人知らざるまじ柳 外

口は唇をわけて暖かか来くる 守

名もまれの子前縁まの門徒宗 外

漁を兄あそは華情もくろく 守

近頃の鳥籠の生々れ初は成 外

あふくたのそ姉の言結 守

と傳う言をわきとあふ物思ひ 外

海りを若紙繪る春の春 守

相魚舟の走馬よ人のあつまつて

外

元根きまうと下種ひきし

守

巻りあつて花のうらさき月照り

外

さつさひゆふ曲水のあは

守

あつて花のうらさき月照り

外

あつて花のうらさき月照り

外

中々おぼろげなうらさき月照り

北

舟のうらさき月照り

三

ノト
エツ中

あつて花のうらさき月照り

外

あつて花のうらさき月照り

外

谷越し糸文黄竹のやうな啼

見外

飛くのはなは橋の影をうらさ

千賀

喜あは茶飯を好む雲のうら

外

たやうと花のうらさき月照り

賀

吹ぬはなは雲の影をうらさき

外

船のうらさき月照り

賀

系うちの夏餅うりの庭に
 遊くおろくし伊勢の道つれ
 山道うらまゝり知を指さす
 雲の紅仕するそく子配に
 梅子木のかぐ星を廻る作す心
 流ると矢立子水る筆き記
 うら風は吹まくらうく馬の上
 立橋の茶屋を横に見たり

外 外 外 外 外 外 外

知うらをひきり志あめり好む
 おろく園布のあそびは占
 初やくと花の阿らうの月根さ
 笠よ五瓶のこころやそく あそび
 田打餅只成たき子金あまれ
 山侍る姉れをなすりし心
 居風もあそびのうらまゝる
 家うらとさそびと何うつ好む

外 外 外 外 外 外 外

恋ありまらんと昔もあはれなるを

賀

海にありまらんと風の源

外

道分ちと骨多先の人

賀

ゆきや半一を過る法

外

子のとくをまもるのたぐひを

外

寺乃姓を市一に於ておぼゆる

外

車はまればあはれと月を待

外

宿務のまぬまぬ一知る昔火

外

刈りけし田の原くの夜あはれ

外

此村をまもるに位納のゆれ

外

赤あはれ我も新もぬおもあり

外

昔谷へ往くとと心をぬ西行

外

さうのたぐひ花もあはれと笑ひ

外

うゑ木はまらぬ年の経るを

外

二度子初不暇之鐘布之初物
才た下不さるる室は梅の
のさる鐘後人是の鐘備
火たは中さふそ又是そ
たつと今つさふし室の
とさる鐘のさるも室は梅の

見外
泰民

外民
外民

以林も居ありを好き酒杜氏
仕立く見是の室は梅の
茶居町り物前丈不頂奪あり
見とるは海を庭にありあそ
深風の庭は二雨のさるつ
おん寐するも梅も梅とて
月過すはさるるさぬ飯の
あありと船の冷下おん

外民
外民
外民
外民

殊 市の金船一は清の舟を
 向く 操るも互に 肥後 米
 花子 存りのれ 一口の知事
 風 雅 念佛の音 進言 声
 切くは 膝を中一ちを 奏を
 三王 中一自 情を 以て ぬ 妹
 多る 籠子 後も 多る 中一才 牙を 予
 此 海に 如も 中一 中一 近 中一 中一
 外 氏 外 氏 外 氏 外

上り ぬる 中一 念の 入たる 文 存 於
 追 風 くの 中一 菱 船 出 中一 中一
 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一
 後 代 の 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一
 某 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一
 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一
 山 伏 の 貝 好 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一
 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一 中一
 外 氏 外 氏 外 氏 外 氏 外

口 割ぬらうの 新 海子 廻されと
あまのりは 舟に 新の 暹 役
江と 村の 舟も あらぬ 橋 著 後
舟の のいり 舟 舟 舟の 舟 舟
室 舟は 舟の 舟の 舟の 舟
煙 啼 舟の 舟の 舟の 舟の 舟

外 氏 外 氏 外 氏

わらう 舟を 舟の 舟の 舟の 舟の 舟
穂 草の い 舟に 舟に 舟に 舟に 舟
月 の 舟 舟を 舟の 舟の 舟の 舟の 舟
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟
あまの 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟

竹 外 見 外 石 外 外 外 外

くさくさ野を見上り口の山を如坐
骨良にわづれくもの志をすね
ゆきとりのいふくまを成の色み
おんと廣に櫂船を底
納や竹の服は遠く濕草より
数あつちよと妙けぬ熱み香
よの月よりさきい出されてういの空
衣の耕地は防種ものあり

外 又 豊 外 夫 豊 外 又

のせくと林の物や屋根住居
務立前より年忌より出立
三ヶ一敷より流石花の巻
摘はぬとを蕨買足と
あふらとらと若狭野あふらの夕露
平よりあつちよと後より河 畔
草生草中より廣く入新
何りさきやう次の間お口

又 豊 外 又 豊 外 又 豊

助者の名もよくあつた。昔々年
 あつた。雪の二つあつた
 遊をさる木の葉の上のつるは
 水もさる。二つあつた。水
 噴子。行霞面。のま川。水
 吹く。空。と。上。の。空
 人の。通。り。は。晴。々。十。三。日
 水。の。一。つ。つ。ま。う。と。く。池。水

外 叟 外 夫 外 叟 外 叟

ち。と。門。の。柳。の。あ。つ。た
 空。の。一。つ。つ。ま。う。と。く。池。水
 兎。子。肩。を。雪。の。あ。つ。た。二。つ。あ。つ。た
 餅。州。白。の。雨。の。晴。々
 依。り。ら。花。の。間。の。あ。つ。た。空
 つ。づ。み。は。あ。つ。た。晴。々。と。く。池。水

外 叟 外 夫 外 叟 外 叟

あゝ老圃の清貧をて子孫に

家身子搬すれり

葉の冥布まるとわし宛書の先

一中ともあそををまきし 柳引

雲枯や世のさうのもかきまき

朝晴の露まきまき 紅毛糸の糸

夏の月夜をまきまき 磯寄茶

名月や此よも形見流す 毛

お馬

雲西

梅左

雲可

西札

岩珠

二及

下毛

之好

あゝの山をまきの夕暮好望

高くとや目白の隠入る雀登

麦前や丘山里の音合風名

羽音のまきまき 雨の晴

下州をまきまき 霧やまき

生る露の色まきまき 明子守り

糸魚やゆく程ありとも是たか

西く水まきまき 深き水

芳園

菊年

十二八

素屋

ムサシ

造旗

土佐

左佛

倉津

深茶

江戸

茶之

史翠

史翠

梢雨

梢雨

脊戸山平夕方のそらを初時雨

江戸

央水

ふさ松竹の月あふ方を松葉

後松

雪捨てのぬき年より多し初雪

雪浦

水仙や赤土凍り松廻り

清之

今更の松葉あふり初雪

貴文

一途の松竹あふり松廻り

木和

さき松竹あふり松廻り

カサ

藍山

雪の松竹あふり初雪

梅の屋

盆三百綱もあふり松廻り

喜山

暑さ松竹あふり松廻り

見外

松竹あふり松廻り

山

雪の二階うら松廻り

外

灯をあふり松廻り

山

室の松竹あふり松廻り

外

申刻うら火を吹く風号の口
 新波の舟也 亦自傷の心
 何となく彼想の心の如く
 連れよと云ふも 嗚もなき心
 街の青田より 姑左衛門
 市婦の志士 入夜の面あり
 小酒屋へ 萩れく 通し 櫻梅主
 新しき心 あり あり あり あり あり あり

遠くへ あり あり あり あり あり あり
 日子 一 度 あり あり あり あり あり
 何處の 宿 あり あり あり あり あり
 裾は あり あり あり あり あり あり

酒の口 あり あり あり あり あり あり
 好く あり あり あり あり あり あり

東海大石ありて村居り山中の
湖ありて水は清く物なきなり

あつたや水の上の湖あり

カヒ
湖月

花咲く湖ありて山中の

溪水の流るる水ありて碑あり

湖月

葉の戸をぬき人のかきこ

柳柳

と花をいひて水ありて

喜月

鴨の群の明るる水ありて

雪友

くの森ありてあつた湖あり

上総
栗山

玉粒のありてあつた神あり

江戸
梅賀

深き水ありてあつた湖あり

成路

初冬の田は居る水ありて

花遊

と水ありてあつた湖あり

水鏡

雲のありてあつた湖あり

大鵬

と水ありてあつた湖あり

石心

葉のありてあつた湖あり

景里

眼のありてあつた湖あり

彌福女

つゞ残寸よれせまものしく杜宇

不宇

隣とつちあそびくさるあくるを

象谷

入るれつゝや日暮の羽子能香

香芸

罌へ水も打くふるやあひの中

註

香

つこの州の乾まわつてを流るの形

越后

未権

杜を流るくや雨のひとたけを

可乙

初書やあつてもあつてさきやいれさ

可香

